

近代国文学から国際化時代の日本文学研究へ

——日本文学像はどう捉えられてきたか——

神野藤昭夫

中国で日本文学を教えることのむずかしさ

このところ、いったい日本文学像をどのようなものとして捉えたらよいか、という、いささか身の程知らずの問題に関心を寄せている。

日本文学をトータルに考えなければならないという個人的な自覚は、とっぜんやってきた。

それは、今から十三年前、一九九三年の二月から七月まで、中国の北京日本学研究センターで、日本文学を教えた時のことである。その時に受けた衝撃は、今だに忘れがたい。センターでは、大学院生を教えるのが主たる仕事であったが、同時に、中国各地から集まってきた日本語を教える大学の先生たちの再教育を目的とする、三十名ほどの研修コースでも、日本古典文学を講じた。

講義に先立って、あらかじめアンケートを用意したところ、当時の中国事情を反映するさまざまな情報を丹念に書き込んでくれ

て、何も知らないこちらには大いに参考になった。私は、それらをコピーにとり添削して返却し、原本はしまいで帰国した。だが、彼らの教室での自己紹介と、アンケート中の「あなたはどのようにして日本語を学ぶ気になったのですか。また現在あなたが日本語を通して知りたいと思っている分野はどのようなのですか」という項目に書かれた内容に、不意打ちをくらったのである。

最近、長いこと書庫に眠っていた、その時のアンケートを見つけて出すことができたので、はじめに、そのいくつかを紹介する。彼らは、それぞれの大学（学院とあるのは単科大学を意味する）に在職する助教・講師クラスの若手を中心に、中には助教授もいたが、いずれも主に日本語を教える教師であったと考えてよい。

張家口医学院のS君は「日本は先進国です。中日両国間で、いろいろな交流をするには、かけ橋としての日本語が分からねればなりません。日本語を通して、日本経済、文化の発展史を知りたいです。」と記し、鄭州工學院のCさんは「日本語を通して、日

本の文化や日本の社会、日本人の発想法を知りたいです。」と述べている。以下、江西大学のCさんは「日本の情報を早く中国に伝えるために日本語を学ぶことにしました。日本の各方面を知りたいと思います。」、河北師範大学のRさんは「しかたなく、私が大学に入るその年、山東大学には、ほかの専門が設けてなかったの、日本語を学ぶようになったのです。日本語を通して、日本の社会を知りたいです。」、蕪州絲綢工學院のOさんは「日本語は将来役に立つかもしれないから学ぶことになったのだ。一番知りたいうことは日本政府が私費留学生に対する態度はどうでしょうかと主観的に学ぶ目的もないし、客観的に学ぶきっかけありません。しかし、現在、私は日本語を通して、日本の文化・社会・教育のことを知りたいと思います。」、河北省廊坊師範專科學校のS君は「英語のレベルが低いので、日本語に転学（大学入学試験のために）」。南京糧食經濟學院のHさんは「知りたいのはいろいろあるが、日本人の生活、日本社会状況など」、湘潭大学のCさんは「日本は先進国で、新しい技術をやくしたい。いまは私が日本を通して知りたいと思っている分野は経済です。」、内蒙古大学を出た卓新鉞業學院のH君は「日本語は英語よりずっとやすいとすすめられて日本語を選びました。私は日本語をとおして日本社会像や日本人の心理や日本人の特徴などをしりたいです。」などなどというものであった。

ここで摘記した発言は、中国事情を少しは理解できるようになった現在では、冷静に受けとめることができるが、彼らの話を聞き、これを読んだ直後の私は、彼らの多くが望んで日本語を学んだわけではないこと、彼らが興味をもっているのは、経済的繁栄を遂げている現代の日本にほかならないことに、強く反応して、衝撃を受けたのである。

一九九三年当時、日本では、平成二年（一九九〇）の株価の大暴落と地価の下落により、バブル景気は崩壊し、既に、後に失われた十年とよばれる時代がやってきていたのだが、海に向こうでは、日本の経済的繁栄の幻想は生きていたし、中国も社会主義市場經濟体制への移行による經濟發展が始まったばかりであったから、まだまだ彼我の差には歴然たるものがあつたわけである。

こちらの方でも、そういう先をゆく者の意識がなかったといったら、うそになる。今、振り返ってみると、そういう先をゆくものが、おのれの文化の独自性について語ろうと意気込んでいたということである。しかるに、彼らには、經濟的に成功した現代日本にしか興味がなく、日本の文化・古典文学などにはいっこうに興味がないらしい。そういう実情に疎かったせいもあつて、彼らが新たな時代の日本文化研究の担い手と期待していた私の迂闊さに気づくとともに、彼らの日本文化への関心の低さを示すものと受けとめられたのである。

その衝撃は、いくつかの觀察と推断によって、さらに私の胸中

で自己増殖させられ、彼らが、本音のところでは日本の文化に興味がないのは、しよせん日本文化は、中華文明の亜流であって、真の意味で独自のものがあるなどとは思っていないからではないか、という疑心として結実しはじめたのである。じっさい、そのころまでの中国の日本文化研究の多くは、世界の中心すなわち中華たる中国文化の影響が、辺境の日本の文化のどこまで及んでいるか、すなわち正統の側から眺めて、それがどのように受容という名の変容を遂げているかの確認作業にあつて、受容者側の主体さらには対象そのものに対する柔軟な認識に欠けているという実感を抱くに及んだわけであつた。

そういうただなかで、私はいきなり、日本文化・文学などというものに、ほんとうのところは、そこに独自の価値があるなどとは思っていないらしい人たちに向かつて、日本文学を教えることの困難に直面し、たじろぐことになった、というわけである。それは、じつは、私じしんの中で、日本文学なるものが自明のものとして既にあり、その精髓をいかに伝えるかというレベルの発想しかなかった、ということでもある。日本文学とは、どのようなものとして捉えうるのか、おのれの前に実体として確固として存在したはずのものが、蜃気楼のように漠として曖昧なものに見えだした自分に狼狽した、というのが正直なところであつた。

すなわち、私は、そこで日本文学、延いては日本文化をどう捉え、どのようなものとしてこれを伝えるかという、きわめて基本

的な問題に直面させられていたことになる。

日本文化をどう捉えるかの課題

後に、この問題の本質を自覚的に反芻する端緒を与えてくれた論考に、ドイツ中世経済史研究から中国古代史の研究に転じた増淵龍夫（一九六九～八三）の『歴史家の同時代史的考察について』（一九八三年、岩波書店）に収められた「日本の近代史学における中国と日本（Ⅰ）（Ⅱ）」（初出『思想』四六四・四六八 一九六三年二月・六月）の二論がある。これは、津田左右吉（一八七三～一九六二）と内藤湖南（一八六八～一九三四）の中国の歴史と文化に対する、両極的な立場を検討することによってみずからの研究の立脚点を探ろうとするものであるが、その対比のあざやかさは、日本文学、延いては日本文化を、どう捉えるかを考える指標とするにふさわしいものとなった。

津田が、日本と中国とは、文化的にも歴史的にも別個の世界であり、「過去の知識人の知識としては支那思想が重んぜられたけれども、それは日本人の実生活とははるかにかけはなれたものであり、直接に実生活の上にはたらいひいてゐないといふこと、である」（『支那思想と日本』昭和十三年、岩波書店）と述べるのに対して、内藤は、日本文化は東洋思想の部分的発達として捉え「私は東洋の文化は古来支那中心であつたと思ひます。……黄河の沿岸から

文化が発芽して、それが初め西或いは南の方に開けて、それから段々東方に向つて開けて行つたのが、最後に日本まで到達して来たのであります。」(『日本文化史研究』(創元文庫版(昭和二十七年)による))と述べる。つまり「津田にとっては、中国の文化は、日本の独自の生活や文化の形成に、いいかえれば自己の歴史的形成に、本質的なかかわりをもたない異物であり、これに反し、湖南にとっては、中国の文化は、その中から自己すなわち日本が育つた母胎の如きものであり、自己の外にあるものではない。」(増淵前掲書)ということになる。

このふたつの見解は、同時に日本文化をいかに捉えるかという原理的な問題を提起する、対比的でありながら、繰りかえし吟味されなければならない性質のものであつて、にわかにいづれに与するか、表明すればよいというものではない。少なくとも、私は、ふたつの間を行き来する自由を確保しておくことが、日本文学を柔軟に捉えてゆくために必要な視座であるように感じている。

増淵の論を読み進めることによって、私は、津田左右吉の、あの浩瀚な『文学に現はれたる我が国民思想の研究』がどのような意図のもとに書かれたものであるか、その全貌がいつきよに見えるようになる示唆を得たわけであつた。

さて、北京でたじろいだ私には、その後、学問分野で所与のものとして感得される日本文学像なるものがどのようなものであり、それがいったいどのようなようにして成立したか、つまり近代における

国文学とよばれる学問成立の問題が自分の研究課題のひとつに加わつた。近代の国文学はどのような学問として成立したのか。それをアカデミズムの中で国文学科がどのようにして位置づけられてくるかという制度的な側面と、国文学なるものはどのような目標と方法をもつて近代化の時代にふさわしい学問としてみずから主張するにいたつたのかを、追尋し、検証することを課題にしたわけである。そのことを通して、そのような学問から浮かび上がってくる日本文学像を捉えようとしたわけなのであつた。

このような私じしんの問いに対する私なりの答えを、調べては考え、考えては調べるという追体験的な作業の経過は、日本文学概論の半期分に相当する時間を費やして講じることにした。わかりやすく整理して話すまでには時間がかかったから、聴講する学生諸姉にはずいぶんと迷惑なことであつたろうと思う。

その五年後の一九九八年、はからずも再び北京日本学研究センターに赴任することとなつた。この時には、大学院生だけを相手にしての講義ではあつたが、近代国文学の成立の問題を取り上げ、そこから浮上する日本文学像の性格がどのようなものであつたか、思いを新たに、問題提起的に講じた。このころまでの見解は、『近代国文学の成立』という長編論文(『森鷗外論集—歴史に聞く』二〇〇〇年 新典社)にまとめることができた。

その論の要諦は、日本近代の国文学は、日本のアイデンティティを明らかにするというナショナルリズムに深く彩られた学問とし

て出発したこと、近代化という実学優先の時代に、時代遅れの学問をナショナリズムを標榜し、そこに学的意義と目標を掲げることによって、時代に認知されるところの近代国文学なるものは成立した、とみるところにある。

もとより、このような国文学という学問の枠組の認識じたいは、新見というようなものではない。また、このような学問のありかたを積極的に肯定して主張したり、逆に批判したりしたりすることと意図をおいたものでもない。先人たちがたどった、あるいはたどらざるを得なかった道筋を掘り起こし、〈学〉の認識を深めるところに狙いをさだめたのである。それゆえ、その認識更新の作業は今も続いており、本稿では、その後知り得た情報にもとづく知見と、新たな日本文学像を模索する柔軟さが必要であることを記す。なお、旧稿との叙述、表現の重複は諒とせられたい。

近代国文学とテーヌの文学史との出会い

国文学の近代を象徴するできごとは、文学史との出会いにある。「本書は実に本邦文学史の嚆矢なり」と宣言する、三上参次（一八六五―一九三九）と高津鋏三郎（一八六四―一九二二）の手になる『日本文学史』上下（明治二十三年（一八九〇）一〇月 金港堂）は、その緒言で、西欧の文学書を繙き、その編纂法に感心して、「文学史といふ者ありて、文学の発達を詳らかにせるを觀、之を研

究する順序の、よく整ひたるを喜びき。」と述べる。彼らの親しんだ西欧の文学書というのは、具体的には、イポリット・テーヌ（Hippolyte Taine 一八二八―一九三）の文学史であったことは、既に前稿で記したところであった。

三上の回想（『明治時代の歴史学界―三上参次懷旧談―』一九九一年 吉川弘文館）によれば、

当時我々は文学史の上においては、仏蘭西のティンの文学史を多く読んだものです。これとても図書館に行っても、只今のように同じ書物がいく冊も置かれるということがなかったから、よほど上手にやらないとほかの人に借りられてしまひ、困ることがしばしばあった。

と述べているように、『日本文学史』の背後にはテーヌの影響が想定されるわけである。しかも「よほど上手にやらないとほかの人に借りられてしまひ」とあるように、おそらく帝国大学文科大学の学生たちの間では、共通の関心事であった事情を推察することができる。三上参次と高津鋏三郎が和文学科（東京大学時代は和漢文学科であったが、帝国大学の発足に先立って明治十八年二月和文学科と漢文学科に分離し、さらに明治二十二年六月国文学科となる）を卒業するのは、明治二十二年（一八九九）七月のことであるから、彼らがテーヌをあらそって読んだおおよその時期を推測することができる。ちなみに彼らの一年以上には上田万年（和文学科）がおり、三年下には芳賀矢一（国文学科）がいた。

この『日本文学史』の刊行に先立つこと約半年。明治三年（一八九〇）四月には、関根正直（一八六〇—一九三二）の『小説史稿』が金港堂から出ている。小中村清矩の記、義象の書（二二頁）と著者の序（二頁）に続いて、本論部分一一三頁に、原稿を読んだ坪内逍遙と饗庭篁村の「手翰」（書簡）（一一頁分）が加わり、それに作者列伝九一頁が付されたものである（ちなみに『日本文学史』は、本文それだけで、上巻が四五一頁、下巻が五四〇頁。そのほか緒言十四頁は上下巻ともに付され、それぞれ十八頁と二六頁の「目録」（目次）が加わる大冊である。）。

この『小説史稿』に対して、北村透谷（一八六八—一八九四）は『女学雑誌』（二二一—二二二号、明治三年五月三日）の「寄書」欄に「文学史の第一着ハ出たり」という文章を書いている。その冒頭「関屋正景氏の手に成りたる小説史稿は兎に角日本文学史の第一着手なり。」と書き、続いて「吾人は氏の史稿に於いて甚だ失望する所なきにあらず」と記す。「関屋正景」とあるのは「関根正直」にちがいない（誤植であろうか）が、文中「今ま欧州の歴史は文学史の討究によりて局面を一変せんとす。」とあり、さらに「ティン氏言へるあり」とあって、ティンに言及していることに注目させられる。ティンは帝国大学の学生だけではなく、透谷ら、欧米の文学動向に関心をもつ人々によっても読まれていたのである。

透谷の文学史への関心は、明治二五年（一八九二）十一月に博文館から出た大和田建樹（一八五七—一九一〇）の『和文学史』

（自序には「一日友人の持ちたるコリア氏の英文学史を見て、我国にも斯かるものを書いて見ばやと、まづこゝに思ひ起しつるが」とみえる。本文は六三八頁ある。）について、『女学雑誌』（三三八号、明治二六年二月十一日）の「批評」欄で取り上げているところから窺われる。「頃者文学史の世に出るもの多しと聞く」と書き起し、「鈴木弘恭氏の文学史」（『新撰日本文学史略』（明治二五年十月、青山堂）のことであろう）に言及したうえで、「爰には大和田先生の和文学史に対する愚見を述べて見む」と記す。だが、結論としては「要するに、文学を文学とも思はず、他の諸科学のかたはらに修学すべしとする今の世の文学の教科書としては著者自からも言へるが如く、簡易にして便利なるべし、文学史としては遺憾ながらもこの書を推重すること能はず」と、厳しい評価を加えている。おそらく彼の胸中には、西欧の文学史が理想の評価軸としてあったからにちがいない。

島崎藤村（一八七二—一九四三）の『桜の実の熟する時』は、彼が明治学院在学時代から、明治女学校の教師となり、教え子に対する苦しい恋から漂泊の旅に出るまでを扱った自伝的小説で、明治の青春をえがいたなかなかよい小説であるが、主人公の捨吉が横浜の商家に「ティンの文学史」を持ってゆき、こっそり読む場面がある。

バイロンの章の終のところ、捨吉は会心の文字に遭遇した。「彼は詩を捨てた。詩も亦彼を捨てた。彼は以太利のほうへ

出掛けて行つた、そして死んだ」

『藤村全集』第五卷 昭和四二年 筑摩書房 五二五頁

藤村じしんは、明治二十四年六月に明治学院を卒業して、横浜のマカラズヤという雑貨店を手伝っていた、その時期と小説の場面は符合する。評論『厭世詩家と女性』から透谷を知り、その影響下に入るのは明治二五年二月。翌明治二六年一月に、透谷・馬場孤蝶・上田敏・星野天知・戸川秋骨・平田禿木らによる「文学界」の創刊に加わっているから、テーヌもまた、そうした仲間うちの知的共通磁場のなかにあつたとみられよう。

剣持武彦（『藤村文学序説』昭和五九年 桜楓社）によれば、藤村は、明治女学院で、二度（明治二五年九月から明治二六年一月までと明治二七年四月から明治二八年十二月まで）にわたって、テーヌをテキストにして英文学史を講じていたという。

テキストということでは、坪内逍遙（一八五九—一九三五）は、明治二三年に東京専門学校（のちの早稲田大学）で、テーヌをテキストに英文学史を講じている（剣持による）。テーヌは一八九三年（明治二六）三月に亡くなるが、逍遙は、いちはやく明治二六年六月二五日発行の『早稲田文学』（四二号）で「故ヒッポリット・テーヌ」という訃報記事を掲載し、「テーヌの我が国における功績は其の書の読まるゝ区域の広狭を標準としていはばルナンに幾倍したるならんテーヌの『英文学史』の如きは現に一二の私立学校の教科書たり而して方今我が国に流布したる英文学史中の最も啓

発力に富みたる者なり」と評して、引き続き「吾人豈彼れが功績の概要と其の為人の片影とを我が読者社会に紹介せずは可ならんや」と述べて、その業績を紹介している。

ここで付言しておきたいのは、郷里岐阜県加茂郡栃井村（現在の美濃加茂市下米田町東栃井）にあって、東京専門学校の校外生であつた津田左右吉が明治二三年に上京して、東京専門学校二年に編入して、翌明治二四年に卒業しており、逍遙がテーヌを講じていた時期と重なることである。津田が逍遙の講義を直接受けているかどうか、さだかではないが、津田が後に『文学に現はれたる我が国民思想の研究』の序文を逍遙に依頼しているのは、東京専門学校時代の逍遙の講義に特別な関心を抱いていたことに由来しはしないかとひそかに考えるとところがあるからである。

丸谷才一（『津田左右吉に逆らつて』丸谷才一批評集第一巻『日本文学史の試み』一九九六年 文芸春秋）が「『国民思想の研究』はヨーロッパふうの文学史にならつて書かれた本であつた。もつと焦点をはつきりさせて言へば、津田はおそらくテーヌの圧倒的な影響の下にあつてこの大著を書いたのである」と述べるのは、私にとっては、指針となる発言である。

当時さかんに読まれていたテーヌの英文学史は、もとより原著（*Histoire de la littérature anglaise*）ではなく、H. Van Laun の英訳本（*Edinburgh: Edmonston & Douglas, 1871*）で、より具体的には、ニューヨークの John W. Lovell Company から出たロヴェル・ライ

ブラリー (Lovell's Library) の縮刷一冊本なのではないかと思われる。早稲田大学には「東京専門学校図書」の押印のある該書が複数残されており、しかも「第三号」「第八拾九号」のように番号が墨書されているのは、教科書として使用された事情を想定させるが、八九という数字は冊数とするとかなり多いので、通算と考えてよいかどうか。ただし、第八九号には、扉に“FOR SALE BY Z. P. MARUYA & Co, TOKYO, JAPAN”と追加印字されており（第三号にはない）、この版が日本での普及の役割をはたしたと推測される。

ところで、この縮刷版は、小さな活字でびっしり組まれているが、今、「バイロンの章の終のところ」で、捨吉は会心の文字に遭遇した。」とある部分を開いてみると、次のようにある。

when he forsook poetry, poetry forsook him ; he went to Greece in search of action, and only found death.

すなわち『桜の実の熟する時』には、「以太利イタルのほうに出掛けて」とあるが、じつは「希臘ギリシアのほうに出掛けて」とあるべきであることが判明する。

さらに、国木田独歩（一八七一—一九〇八）の『欺かざるの記』（明治二六年二月四日より明治三十年五月十八日に至る）には、「ティン文学史」「カーライルの篇」を読み始めむ。（明治二六年三月二三日）、「昨夜、ティン」「文学史」を読む。（明治二七年一月二二日）、翌二三日にも「ティン」「文学史」を読む。」とあって、

独歩もまたテーヌに親しんでいたことが知られる。独歩は、明治二一年（一八八八）五月に東京専門学校英語普通科に入学しており、明治二三年九月には、英語政治科に入っている。独歩がテーヌを読んでいるのは、逍遙の講義などによる直接的な影響が考えられる。彼の在学時期は、逍遙がテーヌを講じていた時期と重なるのであり、これを機縁として、彼はテーヌを既に読んでおり、その後も緋き読むということであったのでないか。テーヌをカーライルやテニソンと比較して、これを論ずるくんだり（明治二六年八月十九、二二、二九日）があるのは、テーヌとの出会いが遡ってあることを窺わせる。

この独歩ら二人が発起人となって青年文学会が設立されるのは、明治二三年十月。その第三回例会には、来賓として坪内雄蔵（逍遙）、徳富猪一郎（蘇峰）が招かれ、朝九時からの開始ではあったが、五十数名の出席があった（『青年文学雑誌』第一号 明治二四年三月六日発兌の本会記事による）という。独歩の「明治廿四年日記」にも「此之日坪内逍遙先生徳富猪一郎氏出席せらる。」とあり、この時のふたりの話の内容については、独歩の盟友である水谷眞熊の「水谷日記」（明治二十四年日録二）及び前掲「青年文学雑誌」に詳しい（『定本国木田独歩全集』第十巻〈資料編、平成七年増補版発行 学習研究社〉による）。

その「青年文学雑誌」第一号に記された本会会員の中に「津田左右吉」の名がみえる。じつさい、津田左右吉は、この青年文学

会の『青年文学』（第六号）に、「鯉」というペンネームで「文学一班」を読む」という文章を寄せていることを知った（『津田左右吉―その人と時代―』展示図録〈美濃加茂市民ミュージアム平成十六年二月〉による）が、それは、明治二五年四月であり、『津田左右吉全集』第二三巻には、この一文だけではなく、翌五月の第七号掲載の「没理想論の根拠」（ただし『定本国木田独歩全集』第十巻所載の『青年文学』の目次にはみえない）、明治二五年十一月の第十三号掲載の「史論の流行」（八十八村草舎主人）を見出すことができる。独歩の『欺かざるの記』にしきりに出てくる「津田」なる人物は津田鍛雄のことであるが、「水谷日記」には、津田鍛雄だけではなく、津田左右吉が水谷のもとを訪れる記事が見え（明治二四年六月三日、明治二五年五月八日、十一日）、試験成績の結果、津田が「吾級ヨリ優等生ナリ」（明治二四年五月十九日）ともある。

一方、津田の回想（『東京専門学校時代のこと』全集第二四巻所収）によれば、この青年文学会の母胎じたいがクラスの回覧雑誌に遡り、「会のおもな世話人はインドウ・ヒヤクタ（引頭百太）、ミズタニ・マクマ（水谷真熊）などであつた。クニキダ・テツオ（国木田哲夫、このころ独歩といつてゐたかどうか、よく知らぬ）も同人となつたが、これも文学科の学生ではなかつたかと思ふ。」とある。

丸谷才一が、津田の『国民思想の研究』にテーヌの圧倒的な影

響をみていることは、既に記したところだが、このような交友を介して、津田もまた、テーヌを共有する時代の大きな輪のなかに連なっていたことが浮かび上がってくるのである。

かくして、テーヌの波紋は大きく広がってゆくことが予感されるわけであつて、識者の示教をも得て、テーヌがさかんに読まれていたこの時代の証跡をさらに見出したいと願っている。

テーヌ受容と「国民の心」の問題

では、テーヌの英文学史がさかんに読まれたということは、いったいどういう意味を持っていたことになるか。

瀬沼茂樹によれば、テーヌの文学史の特色は、「人種」「環境」「時代」を本源的原動力として強調するところにあつたという（瀬沼茂樹訳『文学史の方法（附作家論）』解説 昭和二八年 岩波文庫）。さらに最近では、鈴木登美（『女流日記文学』の構築―ジャンル・ジェンダー・文学史記述―『文学』第九巻第四号 一九九八・一〇、ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典―カノン形成・国民国家・日本文学―』一九九九年 新曜社）が、「テーヌがとりわけ注目したのは、環境とともに、彼が「人種」と称する、イギリス、フランス、ドイツなどヨーロッパの主要諸国の「持続的」な「国民的心性」「国民性」であつた」とその特色を焦点化して述べている。

この点において、三上・高津の『日本文学史』では、

仏国の碩学ティンは、文学史を編して、其国の心理学を研究すといへり。これは。心理学にて心内の現象、智情意の三者を知り得るがごとく、文学史は、以て其国民の心を窺ひ得べしといふ意義なり。

と述べている。テーヌがさかんに読まれたことと、テーヌの特色がそのまま受けとめられたことは単純に重ならないわけであって、テーヌの流行の発掘とともに、その読まれ方の分析が必要であるが、少なくとも三上らは、文学史が「国民の心」を窺うものであることを認識していた点は、注目に値する。彼らの文学史への関心が、国民性を明らかにする問題へと繋がってゆくと考えられるからである。

三上の三学年下の後輩であった芳賀矢一は、「三上博士在職二十五年祝賀会祝辞」（芳賀檀編『芳賀矢一文集』昭和十二年一月富山房）で、次のように回想している。

私どもが在学したころの文科大学は、学生全体の数が三十名内外であつたので、大学院生の三上君が發起せられて、文学談話会といふものを組織し、毎月一回神田あたりの貸席か何かで、会合を開いたのであります。その中には尾崎紅葉や正岡子規や夏目漱石なども、その会の会員であつたのであります。その中に君は高津鯉三郎と合著で、日本文学史を出されました。

この文学談話会については、『早稲田文学』（四〇号 明治二六年五月二五日 文末に「S. H. 稿」とある）に、

明治廿二年紅葉、忍月、思案等の諸氏なほ大学にありし頃上田、三上両学等發起せし所会員は大学の純粹文学科の学生及び学士等より成り和漢英独仏を問はず互に其の修むる所の事柄につき毎月一回相会して話し合ふを以て目的とするなりといふ

とあり、その発会の時期やメンバーの詳細について知ることができる。この文章では、こうして創立された会ではあったが、しだいに儀礼的会合となり、雑誌も発刊されず、「会員がよし研究の結果をこの会に於て談話すともこれを聴き得るはたゞ少数の会員のみ」という記事があり、その後の文学談話会の動静についてもふれているが、

近頃の『哲学雑誌』に連載する夏目金之助氏の「英国詩人の天地山川に対する観念」の如きは例外なり

とあるのは興味深い。当該の論（『漱石全集』卷十三―一九九五年版 岩波書店）所収の冒頭には「本篇は稿者が去る一月文学談話会席上にて講述せる一場の談話に過ぎざれど、哲学会書記諸君の勧めに因り之を本紙に転載する事とはなしぬ。」とあり、明治二六年一月のことと知られる。漱石研究では、夏目漱石とこの文学談話会との関係について、どこまで注目されているのか知らないで、情報として記しておく。

さて、文学談話会のことを記したのは、彼らが国文学の刷新や文学史への注目、さらにはテーヌなどへの関心を共有できうる知的磁場として存在し得たことを窺うためである。三上の三年後輩の芳賀矢一が、帝国大学文科大学の国文学科を卒業するのは明治二五年（一八九二）七月、ついで大学院に進学して小中村清矩（一八二一〜九五）の指導を受けるが、彼が掲げた大学院における研究題目が「日本文学史及文学研究法」であるのは、彼らが同じ時代の空気を吸っていた事情をよく伝えているとみられる。

その芳賀矢一が、明治三一年八月十四日より二三日までの十日間、帝国教育会の夏期講習会で行った講義の速記録に手を入れたのが、富山房から出た『国文学史十講』（明治三二年十二月）である。そこには、

文学の歴史に面白い事は、其文学の中には、おのづと其国民の氣風、思想、感情と云ふものが現はれて居ることであります。国民の思想、道徳、感情と云ふものが、其国文学の上に反映されて居ることが大切なのであります。……政治歴史は、唯外形を見る丈でありますが、日本国民がどんな生活をして居つて、どんな境遇に居つたかと云ふ本当の内面を覗ふには、文学の歴史を知るのが一番宜いのであります。

という一節がみえる。ここには、文学史というものが、国民性を知るためのものとみる認識が示されており、それは同時代のテーヌ受容のうえにあるものとみてとることができる。

ドイツ文献学と国学を復権させた近代国文学の成立

そうした下地の上に、芳賀矢一は、明治三三年（一九〇〇）九月、夏目漱石らと同じプロイセン号に乗って、ドイツへの留学に旅立つ。その時の文部省の辞令に「文学史攻究法研究ノ為満一ヶ年半独国へ留学ヲ命ズ」とあるように、彼は、国文学という学問の新たな方向性を文学史に見つけようとしていたことがわかる。

そこで、彼はかの地でドイツ文献学に出会うことになるのだが、彼は、いったいドイツ文献学に何を学んだか。留学から帰国した芳賀矢一が、かの地で学んだ学問を鏡として、新たに樹立しようとした学問の性格をもっとも明瞭に知ることができるものとして、『国学とは何ぞや』という講演記録がある。これは『國學院雜誌』の明治三七年一・二月号に掲載されたものであるが、明治三五年八月にドイツから帰ったわけで、いわばドイツで発展的に結晶させた彼の思想を盛り込んだ講演ということが出来る（補説参照）。

彼は、最初に、国学なるものがどのような学問として把握できるかを問題にして、荷田春満（一六六九〜一七三六）以来の系譜に注目する。春満が、儒学校すなわち儒教の学校に対して、「皇国の学校」を建てるべきだと上申した「創学校啓」（享保十三年（一七二八）の考え方、すなわち国語国文を基礎として、純然たる日本人の道、日本の国家を説明しようとしたところに、国学の創立者たるゆえんがあると述べる。以下、いわゆる国学の四大人につ

いてふれ、国学とは、文献を通して民族のアイデンティティを探る学問的理念をもったものであると規定する。

そこから、彼は、国学とは西洋ではどのような学問として存在するかについて論を進める。西洋の文明は、ギリシア・ローマの文明を源流としている。ヨーロッパでは、自分たちの文明の源となる古典学をフィロロギイ（文献学）と称している。そのフィロロギイ（文献学）の学問的方法は、ギリシア・ローマの昔の文学を基礎とするものである。

さらに、そのような西洋の古典学は、最近では、古典古代を対象とするだけではなく、イギリスの文献学、フランスの文献学、ドイツの文献学というふうに、自分たちの民族の由来を説明するものへと一歩進んできている、と言う。

そこから、彼は、学問の進歩とともに、細分化してゆく学問領域のなかで、さまざまな分野を包括するところの文献学のような学問が成り立つ根拠を、アウグスト・ベック August Böckh（一七八五—一八六七）、ウィルヘルム・フンボルト Karl Wilhelm von Humboldt（一七六七—一八三五）、ヘルマン・パウル Hermann Paul（一八四六—一九二二）の主張を紹介しつつ述べる。すなわちベックは、さまざまな分野の学問を総合的に見ることによって、それらの間に関係を見出し、過去を再現するのが文献学の目的であるといい、フンボルトは、このような文献学に、ウィセンシャフト・デア・ナチヨナリテートつまり国民の学問、いいかえれば国

学という名称を与えている。ひとつの国には、その国特有の特性がある。その特性を指摘して、外の国民と区別するのが国学の目的である、ということになる。パウルもまた、文献学の目的が、ひとつの国民に特有な精神生活を知るところにあると明言している、と述べる。

芳賀は、国学の理念と方法が、西洋の文献学の理念と方法に重なるものであることを述べて、そういう西洋の学問の理屈と權威を媒介にして、国学という学問を再評価してみせ、俺たちの学問は古いどころか、自分たちの国、民族を知るだいな学問なのだと言く。西洋の学を媒介に、前近代の伝統に近代の国民国家の思想をあざやかに着せてみせたことになる。

このように、眺めてみると、芳賀における「文学史」の問題は、文献をもとに、国民の精神生活の特性を、歴史的に、総合的に捉えてゆく、そういうものへと深められていったとみることができ。すなわち、芳賀は、ドイツに出かけ、文献学というものを持ちかえることによって、国文学という遅れた学問を、国家有用の学として底上げしてみせ、「国民国家」の形成に役立つ留学生としての使命をみごとに果たしたことになる。

もとより、芳賀における国家の要請と個人の使命との矛盾のない一体化には、『舞姫』の太田豊太郎や『私の個人主義』を語る夏目漱石のように、国家と〈個〉との葛藤の姿はない。近代文学のテーマが〈個〉とか〈自我〉にあったとすれば、芳賀の選びと

った学問の枠は〈国〉〈国家〉〈民族〉といったところにあり、日本文学像もまた、そのような国民国家の特性を明らかにするあるいは創りあげてゆくにふさわしいものとして捉えられたものであった。そこには偏りとか歪みとかが孕まれているはずであると同時に、その後の日本文学像の基底をなしたものであることをも、私たちは強く意識化しなければならないだろう。

かくして、日本近代の日本文学像なるものを明らかにしてゆく課題が浮上するわけであるが、もとより、それは本稿がよくする課題ではない。だが、そのような日本文学像をあえて歪みとして捉える視点こそが新たな時代の日本文学像を可能にしてゆくということでもあるだろう。

偏頗をかかえた日本文学像刷新の時代へ

最後に、ふたつの話題をとりあげて本稿の締めくくりとする。

昨年十月七日、跡見学園女子大学文学部人文学科主催による、大学院人文科学研究科日本文化専攻の設立を記念する国際交流会が、中国山東大学の高文漢教授（『中国古代比較文学研究』一九九九年 山東教育出版社）ほか多数の著作がある。同大学外国語学院副院長兼東語系主任。中日比較文学研究会副会長）を迎えて開催され、「五山文筆僧中巖円月について——その経世観を中心に」という講演を聞くことができた。

高教授は、最初に、日本文学には大きなふたつの流れ、すなわち漢文学と和文学があるとみられること、日本の漢文学には、平安初期と南北朝および江戸時代後期の三つの隆盛期があることを指摘された。さらに明治以降の漢文学についても衰退したばかりとはいえないとの見方も示された。中国からみれば、日本の文学なる山脈は、漢文学までふくめてその総体があることを示した点において興味深く、和文学に重きをおいて日本文学を捉える近代日本の日本文学像と異なるまなざしが提示されたことになる。

さらに本論に入って、五山禅僧の中巖円月（一三〇〇―一三七五）の生涯とその文学、特に後醍醐天皇への上表文「上建武天子表」などをとりあげ、その思想と文章を高く評価すべきであることを説かれた。いったい近代が捉えた日本文学像のなかでは、五山の禅林文学は遠景におかれており、円月の存在は知るものの、彼を本格的に取り上げ、日本文学史のなかに定位するという視点は、基本的に欠落している。多くの場合、彼は、思想史、宗教史上のひとという扱いである。これに対して、高教授の円月評価は、詩は志をいうもの、すなわち価値あるものは、独善でなく、社会現実を目をむけたものであるべきだという、中国の伝統的な文学観に根ざしたものであるといえよう。中巖円月を論ずることじたいが、異国のまなざしと価値観によって捉えられた文学像を反映したものであったことになる。

いま、にわかに中国の視点から捉えられる、このような日本文

学像をそのまま受け入れる必要があるということではない。しかし、国学の伝統の再評価のうえに成立した近代日本の日本文学像が、空間あるいは価値観を異にする世界から見れば、偏頗を抱えることによって特色づけられたものであることは確かであろう。

翌十一月の十七・十八両日には、国文学研究資料館主催の「海外から見た日本文学の研究—内と外をのりこえて」をテーマとする第二九回国際日本文学研究集会に出席した。世界各地の研究者十一人の研究発表、六人のポスターセッション（日本文学の分野ではおそらく最初の試み。若手を対象とした質疑を加えてわずかながら十分の発表だが、レセプションでの交流も加えて成功であった）、さらにオランダ、ライデン大学のウリエム・ヤン・ボート教授の講演を聞き、プログラムのさいごに同集会の運営委員長たる任務から総括発言を行った。

開催テーマは「海外から見た日本文学研究」ではあるが、サブタイトルに示したようにもはや日本文学研究に内も外もありはしない、今や内とか外という発想をのりこえてゆかなければならない、そういう時代に入っていること、日本のアイデンティティを明らかにするというナショナルリズムに深く彩られた学問として出版した近代国文学が捉えた日本文学像は、おのずから偏りを孕まざるをえなかったこと、しかも、多くの日本人が、そういう偏りを偏りとして自覚しないまま、近代が線引きした日本文学像を抱えて今日に至っており、そのような自己限定的な日本文学像をよ

り大きく掴みなおす必要があること、そして国際的な視点は日本文学に新たな研究の沃野を豊かに齎すこと、などを述べた。

いったい日本文学とは何か。日本人による文学か。日本語による文学か。はたまた日本列島において生み出された文学の謂いか。国際化の時代を迎えて、近代国文学が生み出した目に見えぬ日本文学像の呪縛から解き放たれて、新たな日本文学像の捉えなおしの時がやってきている。それはとりもなおさず新たな日本文化像の捉えなおしにはかならないであろう。

【補説】 藤原克己に、芳賀がドイツ留学直前の明治三十三年八月、帝国教育

会の夏期講習「国学史概略」で、「国学者が二百年やつて来た事は、つまり日本のフィロロギーであつた。」と発言していることに注目して「これはすでに、帰朝後の芳賀が提唱する日本文献学のエッセンスにほかならない。」という重要な指摘がある（藤原克己・長島弘明「日本の高等学校における古典教育の現状分析と国文学批判—新しい古典学のために—」『論集 近現代社会と古典』〈古典学の再構築〉研究成果報告集Ⅷ）平成一五年三月）。なお、カール・フロレンツ（一八六五—一九三九）が芳賀に与えた影響を重視する見方が、佐藤マサ子『カール・フロレンツの日本研究』一九九五年 春秋社）にみえる。再校時に笹沼俊暁『国文学』の思想』（二〇〇六年 学術出版会）に接した。注目すべき業績として追記する。